



村は、帰村した農家に
るわけにも
いれない。

東京電力福島第1原発事故をきっかけに、農地除染と農業再生のため福島県飯舘村に通うようになって9年が過ぎた。桃の品種や日本酒の銘柄の多さとそのうまさに驚き、放射能は全く気にならないのに、最近では体重計に乗るたびに身の危険を感じている。同県は出荷する全てのコメのセシウム濃度を今も測定している。もちろんセシウムは検出されていない。村も同様である。にもかかわらず、風評を懸念して出荷用のコメ作りをする農家はほとんどいない。かといって、除染した農地を放置するわけにもいれない。

村は、帰村した農家に
るわけにも
いれない。

「農地を守る農業」「生きがい農業」「なりわい農業」「新たな農業」という四つのスタイルを提案している。村の菅野宗夫さん(69)は2012年からNPO法人ふくしま再生の会と共に除染実験を繰り返して、除染した水田で酒米を育て、同県喜多方市

学問は出会いと現場から

内ではデータに基づいて液肥を自動灌水する土耕栽培システムが動き始め、いまや宗夫さんは「新たな農業」にふさわしいスマート農場主である。大久保金一さん(79)は、原発事故後にコメ作りを諦め、山奥にある家の周りにスイセンやアヤメを植え、ひっそり

仙人」と呼ばれている。「稲のことは稲に聞け、農業のことは農民に聞け」とは、東京大農学部の前身である駒場農学校を卒業し東京農業大初代学長に就いた実学的農学者横井時敬先生の言葉である。農業は本来、総合的な科学技術の実践である。にもか

大食農学類が中心になって、復興農学会の設立に向けて農学者が動きだした。この会は研究者や専門家のみならず、現場の農業者や中学生、高校生も会員になれる。人生は出会いである。飯舘村に行かなかつたら正義感あふれるNPO法人ふくしま再生の会のシニアボランティアや、事故後の失意から勇敢に立ち上がろうとする村民に会うことはなかっただろう。この春、故郷を離れて大学生になる若者にはさまざまな出会いの中から自分に合った学問を身に付け、現場から課題を自ら発見し、自分の学問と現実の社会をつなぐ道を築いてほしい。

(東京大大学院農学生命科学研究科教授)